

犬の尿道下裂の1例

○浅枝英希，小出和欣，小出由紀子，矢部摩耶（小出動物病院・岡山県）

尿道下裂は陰茎腹側面の発育に欠陥があり，その近くに外尿道口が開いている状態であり，胎生期のアンドロゲン作用障害により発生する先天性異常である。主として雄犬が罹患し，陰茎，包皮の奇形を伴っている。外尿道口が陰茎先端に開いていないことで診断は容易だが，その開く位置によって亀頭部，陰茎部，陰嚢部，会陰部等に分類する。症状は示さないこともあるが，尿失禁，尿道周囲の皮膚炎，再発性尿路感染症などの症状を示すことがある。今回，我々は陰茎奇形を伴った長期にわたる尿路感染，陰茎周囲の炎症を起こしていた症例に会陰部の尿道下裂が確認され，治療する機会を得たのでその概要を報告する。

【症例】

シェルティー，雄。

初診時(9カ月齢時)，当日症例を譲り受け混合ワクチン接種を目的に来院された。その際，外観上陰茎が矮小であり，包皮の形成不全，その周囲の粘膜露出が確認された(図1)。1週間後，陰茎周囲の炎症および陰茎の乾燥が確認され，合成副腎皮質ホルモン性ローション製剤(デルモゾールGローション，岩代製薬株式会社)を処方し，陰茎周囲を清潔に保ってもらうよう指示した。その後も陰茎や陰茎周囲からの出血を繰り返した。1歳3カ月齢時には，頻尿，血尿を主訴に来院され，尿検査を行った。尿はpH7.5，蛋白3+，潜血3+，沈渣にてストラバイト結晶が多く観察された。膀胱炎を疑い，止血剤，抗菌剤を処方し，また超音波検査にて音響陰影を伴う明瞭な結石エコーが観察されたため，食事に療法食(c/d，日本ヒルズコルゲート株式会社)を用いた。その後は，抗菌剤を休薬すると膀胱炎が再発し，抗菌剤を再開するといった状態を繰り返した。

症例は再発性の尿路感染のために，3歳3カ月齢時に去勢手術と同時に陰茎周囲の粘膜露出部の整復および陰茎の摘出，陰嚢部尿道瘻造設術を行うこととした。術前の血液検査では特に大きな異常は認められなかった。手術前の剃毛時，陰茎先端に尿道が開いていないことや二分陰嚢が確認された(図2，3)。また尿道開口部が肛門直下の会陰部に存在していた。術前に会陰部の尿道開口部より膀胱内へカテーテルを挿入した(図4)。手術は陰茎先端から陰嚢後方までの皮膚を切開し，体壁から陰茎を分離し，縫合した(図5)。また同時に去勢手術も行った(図6)。

術後，術創周囲の感染が認められたが，感受性試験の結果に適合した抗菌剤を使用することで制御できた。症例は術後4カ月現在，療法食のみを継続し，経過良好に推移している(図7，8)。

【考察】

本症例では初診時から陰茎の奇形やその周囲の粘膜露出にばかり着目し，手術前の剃毛時まで尿道下裂の存在に気づけなかった。本症例は長毛種であるシェルティーであり，剃毛を実施しないと確認は容易ではないかもしれないが，注意深い身体検査を怠ったことは反省点であった。矮小陰茎や二分陰嚢，その周囲の粘膜露出などは尿道下裂に高率に伴う先天性異常であり，それらが見られる際には尿道開口部の確認が必要と思われた。尿道下裂は，何も臨床症状を示さないこともあるが，本症例では陰茎周囲の皮膚炎や再発性尿路感染症を起こしていた。皮膚炎は包皮形成不全による陰茎の露出や周囲の粘膜露出によるものと考えられ，尿路感染症は尿道開口部が肛門直下に存在していたために上行性感染が起きやすくなっていたためと考えられた。本症例の治療としては，粘膜露出部位の整復や陰茎の摘出により美的価値を得るとともに，皮膚炎の改善もみた。術後4カ月現在は膀胱炎も落ち着いており，尿道開口部周囲の粘膜露出を整復したことが一定の効果を示したものと考えられる。しかし肛門直下に尿道開口部が存在していることには変わりないため，今後も尿路感染症に対する注意深い経過観察が必要と思われる。

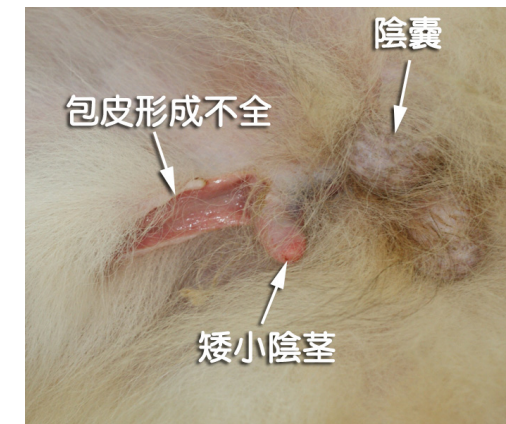


図1 初診時陰茎周囲外観(9カ月齢時)

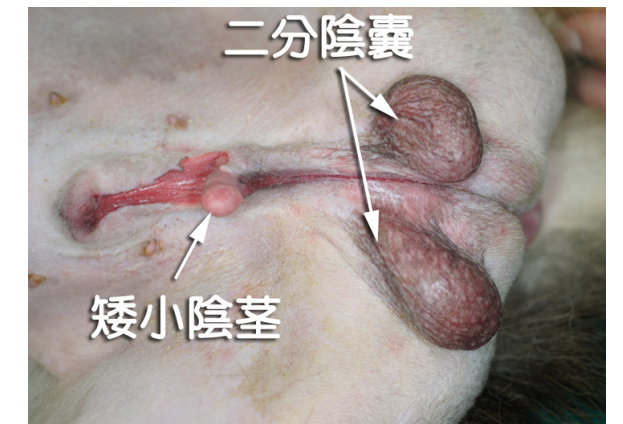


図2 手術前陰茎周囲外観(3歳3カ月齢時)



図3 手術前陰茎周囲外観



図4 手術前尿道開口部カテーテル挿入時



図5 手術直後外観



図6 摘出組織



図7 術後40日の患部外観



図8 術後40日の患部外観